

## 東日本大震災被災地における方言教育の取り組み

小林初夫<sup>1</sup>・半沢康<sup>2</sup>

### 1.目的

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により、大きな被害を受け、今もなお多くの住民が避難生活を送っている福島県は、長期にわたる避難生活により、地域コミュニティの崩壊や世帯分離が起こり、方言の衰退が加速し、次世代への継承が困難になってきている。そこで、方言の保存と継承を支援するためには、将来の地域社会と方言の担い手である子どもたちへの方言教育が有効であると考え、小学校において方言の授業を実施した。

現在の国語科教育では、学習指導要領に基づいて、小中学校で方言を扱うことになっているが、方言主体の学習ではなく、共通語学習のための方言学習となっており、授業時数も1～2時間程度の配当である。また、教科書教材は全国共通なので、子どもたちにとってはなじみが薄いものであり、親しみを持って学習できるものにはなっていない。そのような現状を踏まえ、子どもたちが興味関心を持って、意欲的に学習に取り組むことができるように、さまざまな工夫や配慮をしながら、方言の授業を実施した。本発表では、授業の準備や展開で工夫・配慮したことを中心に、方言教育の取り組みを報告する。また、授業の実際については映像で紹介する。

### 2.授業の概要

授業は2015年2月に福島市立岡山小学校で実施した。本来ならば避難指示が継続している被災自治体の学校で実施したかったが、休校中の学校も多く、少人数ながら再開した数校の学校も県内各地に分散している。これらの学校で特別授業を行うことは困難であると判断し、被災の程度が比較的軽微であった福島市の学校において実施した。小林の勤務校である岡山小学校は双葉郡浪江町の避難児童を受け入れており、避難児童が仮設住宅から通学している。そこでこの岡山小学校で6年生を対象にして、国語の授業として方言教育を行った。

授業テーマは「ふるさとのことばを学ぼう～福島の方言～」とし、ねらいを「福島の方言に興味を持ち、意欲的に方言について調べたり、使ったりすることを通して、日本語の表現の豊かさに気づくことができる」に設定した。この時期の6年生は学習もまとめの段階に入っている。よって小学校国語科の基礎は十分に身につけていると捉え、授業は3時間扱い(小学校の1単位時間は45分なので135分)として計画し、2回に分けて行った。1回目(45分)は方言の基礎知識と調査方法を扱い、方言調査の宿題を課した。2回目(90分)

<sup>1</sup> こばやし はつお(福島市立岡山小学校) hatsuo31924@gmail.com

<sup>2</sup> はんざわ やすし(福島大学) yhanzawa@educ.fukushima-u.ac.jp

は調査してきた方言形の発表，昔話や福島方言の学習，フリップを使った方言クイズ，方言会話などを扱った。6年生は3学級あり，児童数は73名である。1回目は方言調査の体験学習を演習形式で行うため，各学級で実施した。2回目はゲストティーチャーを招いての授業であり，調査してきた方言形の発表で情報を全員で共有するため，3学級合同で実施した。ゲストティーチャーは学区内にお住まいの高年層おふたり(男女各1名)にお願いした。おふたりとも「福島民話茶屋の会」に所属する地元の語り部であり，方言話者のゲストティーチャーとして適任である。県内方言の特徴等を解説するため半沢もゲストティーチャーを務めた。授業の内容は表1のとおり。1～3が1回目，4～7が2回目である。

表1 授業内容

	テーマ	学習内容	担当
1	方言って何だろう	方言について考える。	小林
2	日本の方言を知ろう	言語地図でいくつかの方言の分布を見る。	小林
3	方言を調べてみよう	方言の調査方法を学ぶ。	小林
4	調べた方言を発表しよう	調査してきた方言形を発表する。	小林
5	福島の方言を知ろう	福島の方言の特徴・分布について学ぶ。	半沢
6	方言を聞こう，話そう	実際に方言を聞いたり，話したりする。	語り部の方
7	まとめ	学習したことをふり返る。	半沢・小林

### 3.授業での工夫・配慮

#### (1)授業の準備で工夫・配慮したこと

方言調査票の調査項目には、『日本言語地図』のほか，児玉卯一郎 1935 などの地元方言集を参考にしながら，方言形が得られやすいものを選定した。宿題の方言調査票には福島市およびその周辺の伝統的な方言形がたくさん記録されており，選定が適切であったことが確認できた。

教材のフリップはイラストレーターとの打ち合わせを綿密に行って作製した。特に思考を妨げる余計な情報が入らないようにすることや，発達段階を考慮して親しみやすいイラストになるように工夫・配慮した。児童はイラストを見て瞬時に何の絵であるかを判断し，イラストに対応する方言形を答えていた。児童に提示するイラストは見やすく，わかりやすいものであることが必須である。これは人の顔を説明するとき，写実的な肖像画よりもラフな似顔絵のほうが有効であることと共通している。

ゲストティーチャーとの事前打ち合わせも綿密に行った。宿題の方言調査票や授業略案を見ていただいたうえで，授業で取り上げる方言形や授業の流れを説明し，時間配分を確認した。そのためゲストティーチャーは授業で取り上げる方言形を取り入れた方言会話を事前に準備することができ，自分の持ち時間を意識して予定どおりの時間配分で授業を進

めることができた。

## (2)授業の展開で工夫・配慮したこと

学習活動 1 - (1)「方言って何だろう」(表 2 参照)では、佐藤亮一 1997 を使用した。小学生にもわかりやすい文章構成であり、またイラストも豊富で親しみやすい参考図書を使用したことにより、児童は方言の基礎知識がスムーズに理解できたようである。学習活動 1 - (2)「日本の方言を知ろう」では、教材『方言指導掛図』<sup>3</sup> を使用した。『日本言語地図』の略図が見やすくカラーで示されており、児童は方言の東西対立や周圏分布に興味を示していた。使用している教科書教材には掲載がないため、児童にとっては言語地図を初めて見る機会となった。学習活動 1 - (3)「方言を調べてみよう」では、方言の調査方法を説明してから授業者がインフォーマント役になり、児童に実際の調査を体感させた。最初は質問のしかたに戸惑っていた児童も慣れてくると積極的になり、意欲的に質問し記録していた。このことは宿題の調査の意欲づけにもなった。宿題の調査ではインターネットや文献には頼らず、必ず家族や近所の人に直接聞いて、聞こえたとおりに記録するよう指示した。

表 2 授業略案

学習活動	時間(分)	授業者の活動
1.ふるさとのことばって何だろう		
(1)方言って何だろう	15	○方言の基礎知識を解説する。
(2)日本の方言を知ろう	10	○言語地図で方言分布を見せる。
(3)方言を調べてみよう	20	○方言の調査方法を説明する
2.ふるさとのことばに親しもう		
(1)調べた方言を発表しよう	20	○グループごとに発表させる。
(2)福島の昔話を聞こう	10	○福島の昔ばなし(方言)を聞かせる。
(3)福島の方言を知ろう	20	○福島方言の特徴について説明する。
(4)方言を聞こう、話そう	30	○フリップを使い方言をクイズ形式で出題する。 ○方言(単語・文)を聞かせる。 ○方言(単語・文)を話させる。 ○方言会話を聞かせる。 ○方言会話をさせる。
(5)感想発表	5	○各学級 2 人(計 6 人)に発表させる。
(6)まとめ	5	○講評をする。

<sup>3</sup> 斎賀秀夫・佐藤亮一監修，三教社

学習活動 2 - (1)「調べた方言を発表しよう」では、児童の発表のひとつひとつを肯定的に受け止めて称賛し、学習意欲の向上を図った。方言には正解や不正解はないこと、その言い方で使われているという事実が大事であるという認識を持たせるようにした。方言に対する正しい認識を育てるためにも大切なことである。学習活動 2 - (2)「福島のお話を聞こう」では、ゲストティーチャーのおふたりに地元で伝わる昔話(「文知摺観音の伝説」「とら猫の恩返し」)を語っていただいた。方言で生き生きと話すゲストティーチャーの語りに児童は真剣に耳を傾けていた。このような語りは生きた教材である。学習活動 2 - (3)「福島のお話を聞こう」では、県内方言の解説だけでなく津軽方言の談話音声も聞かせて東北方言でも違いが大きいことを実感させたり、「4校時(時間目)」や「カットバン(絆創膏)」などを例に「気づかない方言」についても紹介したりした。伝統的な方言しか観念になかった児童にとって驚きは大きかったようである。学習活動 2 - (4)「方言を聞こう、話そう」の方言クイズでは、フリップをフラッシュカードのように使い、対話形式でテンポよく進行させた。リズムカルな学習は児童にとって楽しいものであり、学習した知識の定着にも効果的である。

#### 4.まとめ

最後の感想発表では「初めて知った方言もあるし、おもしろい方言もあったので楽しかった」「これからの生活でも生かしていきたいなと思った」などの声が聞かれた。導入から終末まで児童の興味関心が持続し、意欲的に学習に取り組んだ様子が見ええる。これは児童の実態と発達段階を踏まえた事前準備や、学習過程にさまざまな工夫や配慮をしたことにもよるが、方言そのものが持つ教材としての価値によるところも大きいだろう。今回の授業は3時間扱いという短い時間ではあったが、児童が方言の基礎から発展まで主体的に学習できる単元になっており、中学校や高校でも使える方言授業の原型になるものである。

小学生という初等教育の段階で方言学習をすることは、言葉としての方言を学ぶだけにとどまらず、方言観の形成にも大きく影響するものである。方言に対する正しい認識や自分たちの地域の伝統的な言語文化の理解は、方言の保存と継承の基になるものである。

今後、復興途上で今もなお避難児童生徒の多い小中学校で方言教育を推進していくために、方言の記録とともに教材開発も含めた方言教育を検討していきたいと考えている。

#### 文献

児玉卯一郎 1935『福島県方言辞典』西沢書店

佐藤亮一 1997『日本の方言大研究 6 なるほど方言学入門』ポプラ社

(本研究は JSPS 科研費 JP15K0255700 の助成を受けたものです)